

学位論文要約

中国における大学生の学習行動に関する研究  
— 「三本大学」を中心にして —

広島大学大学院教育学研究科  
教育学習科学専攻

D193902 呉 彤

## I. 論文題目

中国における大学生の学習行動に関する研究—「三本大学」を中心にして—

## II. 論文の構成

### 序章 問題の所在

#### 第1章 多様化する中国の大学

- 第1節 建国初期における民弁大学の誕生
- 第2節 「三本大学」の拡大（第一次・第二次ブーム）
- 第3節 制度の整備期
- 第4節 「統一」される「三本大学」
- 第5節 まとめと考察

#### 第2章 「三本大学」に関する研究の射程

- 第1節 中国における先行研究
- 第2節 日本におけるFランク大学に関する研究の動向

#### 第3章 研究の枠組みと調査の概要

- 第1節 本研究の視点と分析枠組み
- 第2節 調査地遼寧省の概要
- 第3節 調査対象校の概要

#### 第4章 大学生の学習意識と進路意識の現状

- 第1節 大学生の学習意識の実態
- 第2節 就職意識の低迷と進学意識の高まり
- 第3節 自由記述からみる大学生生活の実態
- 第4節 まとめ

#### 第5章 「三本大学生」の学習行動

- 第1節 問題の所在
- 第2節 どんな学生が「三本大学」に入るのか
- 第3節 大学のランクからみる学習行動
- 第4節 「三本大学生」の規定要因
- 第5節 まとめと考察

## 第6章 学習行動と進路意識の関連性

第1節 「三本大学生」の進路意識

第2節 進路意識に影響を及ぼす諸変数

第3節 就職志向の規定要因

第4節 進学志向の規定要因

第5節 まとめと考察

## 終章 結論と課題

第1節 結果の要約

第2節 考察と課題

## 引用参考文献と付録

### Ⅲ. 論文要旨

#### 序章 問題の所在

本研究の目的は学習行動を切り口とし、中国の「三本大学」<sup>1</sup>（中国の呼称であり、ランクの低い大学のことを指す）における大学生の特徴を明らかにすること、および、「三本大学」の役割を検討することである。序章では、「三本大学」を定義し、本研究の目的と課題を明確にした。

まず、なぜ「三本大学」と呼ばれているのかについて説明しておきたい。この呼称の由来は中国大学入試の「グループピング」という特徴（小川, 2019）からである。「中国では、大学入試者は全国統一入試の成績により選抜されており、「その選抜作業は三つのグループに分けて時期をずらして行い、各大学のグループごとに最低合格ライン<sup>2</sup>を設定し、そのラインを上回る得点を取った受験生が選抜対象になる」（石井, 2014, p.2）。また、中国では、四年制の高等教育機関のことを「本科」と呼ぶため、最も合格ラインが低い第三グループの「本科」という意味で、「三本大学」と呼ばれるようになった。「一本大学」は985工程と211工程を含む「エリート校」である。その一方で、「三本大学」はより低い社会的地位にあるものであり、「お金さえあれば、誰でも行けるだろう」「彼らの卒業証書はただの紙だ」と揶揄され、「三本大学生」は世間からの差別に耐えているとされる（賈, 2014）。

一方で、政策上、これらの大学の多くは民弁大学と呼ばれている。中国では、1999年から高等教育の大衆化が始まり、その担い手である民弁大学が著しい成長を遂げている。2002年の『民弁教育促進法』の公布から現在に至るまで、中国政府は相次いで政策や法規を打ち出しており、民弁大学の発展を支持し、規範的な法律を探り出そうという意思がある。民弁大学は徐々に拡大期に入り、これからも「応用技術型人材」を育成する場として定着していくと予想されている。ところが、公的セクターの大学（「一本大学」と「二本大学」）と比較すれば、民弁大学は未だに劣位に置かれ、公的セクター大学の補足と位置付けられ、「周縁的なセクター」（鮑, 2006）と思われる。

しかし、これらの大学は本当にネガティブな存在なのか。日本では、入試難易度が非常に低い大学に対し、「Fランク大学」「ボーダーフリー大学」「マージナル大学」などといった多様な名称が使われている。山田（2009）は、ユニバーサル化とは「大学大衆化にともなって、別の機能を持った大学が付加されたに過ぎ」ず、「エリート大学は現在も研究大学として残存し、その機能を果たすことが求められている」と述べ、「その一方で、ユニバーサル化によって変化を求められたのはここで示したボーダーフリー大学であった」（p.33）と指摘している。つまり、中国の「三本大学」や日本の「ボーダーフリー大学」のようなランクが低く、選抜性が低い大学は、大衆化が急速に進む中で、公的セクターの大学には見られなかった多様で、新しい役割を果たしていると考えられる。この意味で、「三本

---

<sup>1</sup> 2015年から山東省や遼寧省や江西省などといった省は選抜の第三期グループを第二期グループに合併し始めた。しかし、「三本大学」という名称が公的には無くなるにもかかわらず、「〇〇学院」などといった特有な言い方で「三本大学」を指す言葉が存在し、一般的にもそのように認識されている。そのため、「三本大学」は実質的には合併後も通称として存在していると考えられる。

<sup>2</sup> ここでは遼寧省の2012年の全国統一試験の成績（理系）を例として挙げて説明したい。2012年の各ランクの合格ラインはそれぞれ、517点、445点、388点であった。「一本、二本、三本大学」の上線累積パーセントはそれぞれ19%、43%、78%である。すなわち、「一本大学」に進学する学生は成績が省内の上位19%のものである。「二本大学」に進学する学生は成績が省内の上位50%以内の者であり、やや優秀とされるものである。その一方、「三本大学」に進学する学生はほぼ成績が省内で中位、あるいは下位の学生である。

大学」は決して、消極的な存在ではなく、社会の変化に対応して現れたものであり、研究の意義が極めて大きいと言えよう。

ところが、中国においては、大学研究の視点は、依然として公的セクターのエリート校に偏っており、「三本大学生」に関する研究の蓄積は十分ではないのが現実である。鮑（2006）は中国における「三本大学」（原文は民弁大学）に関する研究は強い政策への依存性を持っていると示唆した。「三本大学」に関する先行研究を概観する際にごの特徴が見られる。中国では、「三本大学」に関する先行研究の多くは、政策に焦点を当て、民弁大学の発展や必要性を論じた研究である。そのほか、限られてはいるが、学生の実態に焦点を当てた研究もある。これらの先行研究は「三本大学」の発展やその必要性について検討し、大衆化という背景のもとで、「三本大学」の重要性を強調した。しかし、これらの研究には、依然として三つの問題点が残されている。

第一に、研究の視点が「大学生の進路意識」という研究領域に限られており、「大学生の属性」や「大学での経験」について十分に検討されていない点である。日本では、山田（2010）が指摘しているように、ボーダーフリー大学研究には「ボーダレス・ユニバーシティの現状」、「卒業後の就職とキャリア形成」、「学生の学習行動と学習意識」という三つのアプローチがあった。一方で、中国では、今までの先行研究は高等教育の大衆化がもたらす就職難という社会背景のもとで行われたため、これらの研究が注目したのは「三本大学生」の「進学意識」や「就職に関する考え方」のみであった。それゆえ、そもそも「三本大学生」はどのような家庭の出身者なのか、どのような高校生活を過ごしていたのか、などといった基本的な情報さえも欠如している状況である。したがって、「三本大学生」の特徴を明らかにするために、進路意識という視点だけではなく、学生の属性や、大学での生活や経験について検討する必要がある。

第二に、分析の枠組みが単眼的、一面的だということである。「三本大学生」に関する先行研究の多くは「三本大学」で教授している教師が行ったものであり、調査対象は自分の大学の学生のみであった。そのため、これらの研究を概観すると、いずれも他のランクの大学との比較が行われておらず、分析方法も単純集計にとどまっている。そのため、これらの先行研究では、「大手企業以外が良い」や「とにかく大学院に行く」などのような「三本大学生」の消極的な進路意識を提示しているが、なぜこのような意識が形成されたのかについては看過されてきた。それにもかかわらず、そもそも「三本大学生」が上記のような、より具体的な進路意識が形成される以前に、彼・彼女らの進路分化の意識（就職するか進学するか）がいかんにか形成され、またどのような要素に影響されたのかについてはいまだ解明されていない。

第三の問題点は、「三本大学生」に対する先入観が強く、客観的な視点で分析されていない点である。贾（2014）が「三本大学生」に対する認識は未だに曖昧であり、今までの先行研究は「三本大学生」を誤解させてしまう傾向があると指摘したように、今までの「三本大学生」に関する研究はほぼ「三本大学生」を批判するという立場から行われてきた。つまり、上記で述べたように、「三本大学生」の属性や特徴は未だに先行研究の死角であり、十分に分析されていないにもかかわらず、「三本大学生」に対する偏見を払拭できていないまま、多くの研究が行われている。

以上のような先行研究の三つの問題を踏まえて、本研究では「三本大学生」の特徴を明らかにし、「三本大学」の社会的役割を明らかにすることを目的とする。この目的を達成するため、本研究は学習行動を軸として、先行研究よ

りさらに多角的な視点で分析を展開したい。ここで論じた「学習行動」は大学生の授業中と授業以外の学習に関する行動だけではなく、より広範に大学での学びにつながる活動や大学での生活に関わる行動をも含むものである。なぜなら、4年という決して短くはない期間に、大学生は何を意識しながら大学で学び、どのような生活世界を背景として大学生を送っているのか、これは「三本大学生」を理解するためだけではなく、彼らの視点から大学生が求められている「三本大学」の役割を検討するためにも、非常に重要な意義を持っていると考える。

以上を踏まえ、本研究は上の目的を達成するため、すなわち「学習行動」というキーワードをめぐって、「三本大学生」の立体像を浮き彫りにするために、次の三つの研究課題を設定した。第1に、今まで「勉強しない、能力がない」と言われてきた「三本大学生」はいったいどのような大学生群なのか、彼ら・彼女らの学習行動はどのような特徴を持っているのかを検討する。第2に、大衆化がもたらす就職難や大学院進学熱という時代の背景のもとで、「三本大学生」はどのような進路意識を持っているのか、またそれが「学習行動」といかに関連しているのかを検討する。第3に、「一本大学生」「二本大学生」と比較することで、「三本大学生」の特徴をさらに浮き彫りにし、多角的な「三本大学生」像を描き出すことである。

## 第1章 多様化する中国の大学

第1章では、「三本大学」に関する政策を整理することにより、中国における大学の多様化の過程を明らかにし、社会の「三本大学」に対する態度の変容を明らかにした。なお、政府の文書上には「民弁大学」という呼称が使われているため、本章では「三本大学」の代わりに、「民弁大学」という呼称を使うことにした。

分析結果として、まず、政府が民弁大学に対する態度の変化の過程を明らかにした。具体的には、1970年代末に政府は民弁大学に対して「否定」的であったが、1990年代から「黙認」に変わり、2000年代からは「支持」するようになった。さらに、近年に政府は民弁大学の性質を統一し、健康的に発展を拡大させるという意思がうかがえる。

続いて、政府の民弁大学に対する態度の変化の原因について、各時期の時代背景を考慮しながらまとめた。政府が民弁大学に対する態度の変化は、経済の発展や各時期の教育財政の状況と関連していると明らかになった。

最後に、民弁大学の位置付けの変化が明らかにされた。具体的には、2000年代に入る前は、政策的に民弁大学は周縁的なものであり、公的セクターの大学を代替するものと位置付けられたとうかがえた。しかし、2000年代以降、大衆化の進展に伴い、エリート大学は「研究型人才」を育成する機関として、民弁大学は「応用型人才」を育成する機関としてそれぞれ位置づけられることになった。民弁大学はこれからも、政府の支持のもとで、応用技術型人材を育成する場として役割を果たすと期待されている。

ところが、実際には、民弁大学は必ずしも政府の意図のままに発展しているとは言えないだろう。「教育の空洞化」や「公的セクターの大学の性質を払拭できていない」などのような、民弁大学に対する批判が決して少ないとは言えない（例えば、鮑2006・2016、費2008、李ら2013、常ら2018、潘2019など）。これらの先行研究から、応用技術型大学というスローガンをかかげているにもかかわらず、職業教育が形骸化しており、大学のカリキュラムが結局、エリート大学と同様になってしまうという、現在大多数の民弁大学の実態が推測できよう。

しかし、それでも大衆化という社会的背景のもとで、各ランクの大学の機能は分化し、大学生が、あるいは社会

が、各ランクの大学に対してそれぞれの役割を期待しているのではないか。つまり、ランクが低い大学、いわゆる「三本大学」の学生の学習行動や進路意識はエリート大学とは大きく異なっている可能性がある。こうした視点での分析は、「三本大学生」という新たな学生像を解明するためだけでなく、現在の中国の高等教育の構造を理解するためにも、重要だと考えられよう。

## 第2章 「三本大学」に関する先行研究の射程

本章では、まず、中国における「三本大学」に関する研究をまとめ、その課題及び本研究の視点を提示した。結論を先に述べると、中国の「三本大学」に関する研究は政策への依存性が高く、政策に着目している研究が大多数であり、大学生の視点からの実証的な研究が不足していることを指摘した。最後に、日本における「Fランク大学」に関する研究をレビューすることにより、低ランクの大学を研究する意義を強調した。

まず、中国における「三本大学」に関する研究はごく限られたものに過ぎないが、それらは「民弁大学」の発展や必要性の検討に焦点を当てた研究と学生の実態に焦点を当てた研究に大別できる。

「民弁大学」の発展や必要性の検討に焦点を当てた研究では、鮑・張（2005）、鮑（2006）や邵（2014）の研究が挙げられる。鮑・張（2005）は、中国における民営高等教育機関の発展段階を示し、大衆化という背景のもとで、民営高等教育機関の重要性を強調している。また、鮑（2006）は「民営高等教育機関の発展は公弁高等教育機関との間に緊密な関連性を持っており、社会経済発展とも連動的な関係である」（p.156）と述べ、民営高等教育機関を研究する際に、その地域の発展状況を考慮する必要性を示唆した。続いて、邵（2014）は、「中国政府は「国家中長期教育改革と発展企画要綱（2010—2020）」により、現在民弁大学に肯定的な態度を示している」と述べ、「現在（2000年から）民営高等教育機関はすでに加速期の段階に入っている」（p.23）と論じた。

以上の先行研究は、中国社会のニーズにより民弁大学（「三本大学」）が設置されるメカニズムを明らかにしている。そこで指摘されているように、大衆化の担い手である民弁大学（「三本大学」）はこれからさらに増加する可能性が十分あると言えよう。

学生の実態に焦点を当てた研究では、魏・劉（2010）や賈（2014）が挙げられる。魏・劉（2010）は、「三本大学生」は自分の将来に対して自信がなく、多くの学生は自己肯定感が低い傾向にあると述べ、就職する際に「一本」「二本」の大学生よりも、競争に対する意欲が低いことを明らかにしている。賈（2014）は、山西省の「三本大学」の卒業生を対象としたインタビュー調査から、「三本大学生」に対する社会からの偏見と学生らが就職する際に直面したジレンマを描き出した。また名門大学を目指し、大学院への入学を志望する「三本大学生」が増加しつつあるという「進学熱現象」についての議論を展開した。

上記の研究からは、「三本大学生」が世間の偏見やマイナスの評価という呪縛から解放される道を懸命に模索している姿がうかがえた。これら一連の研究は、「三本大学生」に着目し、その実態の一端を描き出してきたという意味において、重要である。しかしながら、これら一連の研究では、研究対象は「三本大学生」に限られており、比較対象が設定されていない。そのため、「三本大学生」の特徴について十分に説明できていないと考えられる。また、これらの研究が注目したのは「進学意識」や「就職に関する考え方」、すなわち「出口」だけであり、大学の「中身」である学生

の学習行動に着目した研究は管見の限りはなかった。

続いて、日本の先行研究を検討する。日本では「三本大学」のようなランクが低い大学のことを「Fランク大学」「下位大学」「ボーダーフリー大学」「マージナル大学」などといった多様な名称で呼んでいる。山田（2009）や三宅（2014）が指摘しているように、この領域の研究は決して多いとは言えない。これらの先行研究は、「大学への進学」（出身階層や高校での過ごし方）に焦点を当てたもの（寺崎 2014、児島 2011）、学生の学習行動と学習意識に焦点を当てたもの（山田 2009・2010、葛城 2007・2010・2018 など）、卒業後の進路に焦点を当てたもの（三宅 2006・2005・2011、居神 2005 など）に大別できる。

まず、「大学への進学」に焦点をあてた研究について、児島（2011）は350名の私立大学生を対象にアンケート用紙を配り、回収されたデータを入試偏差値ランクにより「上位」、「中位」、「下位」に分け、調査を行った。その結果、下位校の大学生の家庭階層について、「高等教育を経験せず、相対的に技能・保安・生産工程に従事する親が多く、「ファースト・ジェネレーション」として大学に進学するものが少なくはない」ことを指摘した。寺崎（2014）はノンエリート大学生の特徴を明らかにするために、大学進学や大学生活に焦点を当て、国立大学・中堅大学・ノンエリート大学を対象に、アンケート調査を行った。その結果、ファースト・ジェネレーションの比率は有意に高いことを明らかにした。

また、卒業後の就職とキャリア形成に関する研究として、居神（2005）は底辺大学をマージナル大学と呼び、その卒業生が十分な職を得られない現状を描いている。三宅（2006, p.23）は「近年内定率の低さは就職活動の過程で自発的にその活動をやめるものが存在している」と述べ、非選抜型大学生の就職選択行動の実態について報告した。

最後に、学生の学習行動と学習意識という領域について、山田（2009、2010）と葛城（2007、2010）の研究があげられる。山田（2009, p.33）は「ユニバーサル化によって変化を求めたのはここで示したボーダーフリー大学であった」と述べ、ボーダーフリー大学を研究する意義をさらに強調した。そして、「どういう意識と自己認識にもかかわらず、現実の学習や行為には必ずしも結びついてはいない」（山田 2009, p.34）と提示した。今後、データを分析する際に、こうした点に留意する必要があるだろう。葛城（2010）は大学入学前の諸変数との関連から、難易度の低い大学における在学中の学習行動について論じ、「大学入学前に既に形成される学習に対する志向性や学習行動・学習レディネスが在学中の学習行動に強い影響力を及ぼしているのは確かである」と指摘した（p.59）。

### 第3章 研究の枠組みと調査の概要

本章では研究の枠組みと調査対象校の概要を示した。

分析の枠組みについて、武内（2003）は学生文化の規定要因として「大学の特徵（歴史的伝統、大学の規模、カリキュラムなど）」と「入学してくる学生の特性」と「学生の進路」および、「大学の入学の入学偏差値（ランク）」（p.171）の四つを提示している。この枠組みに従い、本研究では、「三本大学生」の立体像を浮き彫りにするため、「三本大学生」という学生層の特徵、および彼・彼女らの学習行動や進路意識を明らかにする。また、それらの相互の関係を検討するとともに、「一本大学」、「二本大学」と比較する。

アンケート調査は、2018年5月19日から2018年6月8日にかけて、遼寧省にある五つの大学で行った。調査を実



施した A 大学、B 大学を「一本大学」、C 大学を「二本大学」、D 大学、E 大学を「三本大学」に位置付けた。なお、A 大学（全国大学ランキングで 100 位前後）と B 大学（30 位前後）は 985 校、211 校であり、エリート校とされている。C 大学は中堅大学であり、D 大学は 1999 年に設置された民弁大学である。E 大学は 1999 年に設置され、F 大学という「二本大学」の独立学院であり、2016 年に民弁大学に転換した。

調査対象の概要について、回答者数は 1,023 名である。有効回答者数は、「一本大学」241 名、「二本大学」419 名、「三本大学」332 名とほぼ同数であり、計 992 名である（有効回答率 97%）。「一本大学」のサンプルでは男性 56.8%、女性 43.2%と性別による差はあまりないが、「二本大学」と「三本大学」では女性に偏ったサンプルとなっている。学年を見ると、四年生の割合が少ない。最後に、専門については「一本大学」、「三本大学」は理系に偏ったサンプルとなっているが、「二本大学」は文系に偏っていた。

#### 第 4 章 大学生の学習意識と進路意識の現状

本章では、調査結果の概要を検討するため、遼寧省<sup>3</sup>における大学生全体の学習に対する意識と進路に対する意識を概観した。その結果、大学生は積極的な学習意識を持っており、就職よりも進学に対する意識が非常に高いことを指摘した。具体的には以下の通りである。

まず、アンケートの結果だけを見れば、現在の大学生は「真面目」なように見える。「授業中の学習行動」、「授業外の学習行動」と「大学での生活」という三つの部分から、現在大学生が「学習行動」の面で表す特徴について検討した。現在の大学生は授業中「真面目」であり、授業外にも図書館などを利用し、勉強するということが分かった。また、現在の大学生のサブカルチャーとして、ファッションを非常に重視していることが挙げられる。

次に、本研究を通じて現在の大学生が非常に高い進学意識を持っていることが明らかになった。調査の結果、大学生は強い進学意識を持っている一方で、就職に対する意識が低いことがうかがえた。また彼らは「名門学校」に執着し、非常に高熱な進学意識を持っている。

#### 第 5 章 「三本大学生」の学習行動

本章では「三本大学生」の属性を明らかにしたうえで、彼・彼女らの学習行動に着目し、その規定要因について検討した。その結果、「三本大学生」は「一本大学生」「二本大学生」と比べれば、より低い階層の出身であり、学力も低いことを明らかにした。また、「三本大学生」は従来から言われていた「勉強しない、遊んでばかり」といった「不まじめ」な学生ではなく、授業への意識は非常に高いことが明らかになった。具体的な分析結果は以下の通りとなっている。

まず、「どのような学生が『三本大学』に進学するか」という問題をめぐって、出身階層と高校時代の生活という二つの面から検討した。出身階層について、本章で用いた指標は出身地、両親の最終学歴、および両親の職業である。これら五つの指標ともに、大学ランクとの間に相関があることが分かった。出身地からみると、「三本大学生」は「北

<sup>3</sup> 遼寧省は「先進地域」とみなされ、2010年の国家統計局のデータを見ると、遼寧省の都市部における一人当たりの所得は全国第9位で、17,717 元である。また、大学数で見れば、遼寧省は最も多北京（60校）と二番目の江蘇省（43校）に続き、山東省と同位の40校となっている。2010年の各省の進学率から見ると、最も進学率の高い上海や北京や天津省に続き43%となっている。

京、上海、広州のような一線都市<sup>4</sup>出身の者が非常に少ない一方で、農村部出身の者が最も多い。また、両親の学歴や職業からは、両親の学歴が高いほど、また、職業階層が高いほど、ランクの高い大学に進学する可能性が高いということがわかった。高校時代の生活から見ると、「三本大学生」の方が高校時代によく塾に通っており、家庭教師をよく利用していた。すなわち、最も授業外学習投資をしていたことが明らかにされた。中国では、統一試験のために、高校は過密なカリキュラム（時間割）を設定している。高校のランクによって、多少異なる場合もあるが、どのランクの高校でもほぼ同様に授業時間は長く、学校外で過ごす時間は非常に短いのが現実である。雷（2005）によると、中国の塾や家庭教師は学校の授業を補習するための場として認識されているため、このわずかな学校以外の時間を利用し、塾や家庭教師を利用するのは通常、成績の低い学生であるという。また、それらの学生は学力が低い可能性が高い。すなわち、このような学生が「三本大学」に進学していると考えられる。

次に、「大学での学習行動」を構成する三つの因子【授業重視】（「授業内容について質問することがある」、「よく予習復習する」、「興味を持つ授業がある」、「自分の成績を重視している」などによって構成されている）、【自主学习】（「図書館が閉館する前までずっと勉強することが多い」、「開館する時間から図書館で勉強し始めるように頑張っている」、「自発的に自習を行っている」によって構成されている）、【ファッション重視】（「新しいファッションを追っている」、「身なりに気を付けている」、「よくカラオケ行く」などのように、ファッションやエンターテインメントに関心を示す因子）を用いて、「一本大学生」と比較することにより、「三本大学生」の特徴的な「学習行動」について検討した。続いて、大学のランクと学習行動との関連性を明らかにするため、変数間の影響を考慮しながら、二項ロジスティック回帰分析<sup>5</sup>を用いて検討した。「三本大学生」は今まで世間から「勉強しない」というイメージで受けとられているが、「エリート」とされている「一本大学生」よりも授業を熱心に受講しており、大学の勉強に熱心に取り組んでいることが分かった。

最後に、「三本大学生」の学習意識が高い理由は、「三本大学」が「学校化」していることにありと考えられる。山田（2010b）はイリイチを参照しながら大学の学校化について「大学は学生が主体的に学習する場ではなく、大学が学生を教授し、学生はそれを受容する場」（p.38）になることと論じている。つまり、大学は高校などと同様に与えられた知識を受容する「学校」となっている。この点については、分析結果だけでなく「三本大学」の大学自体の取り組みからも「学校化」の傾向が見られた。今回の調査対象であるD大学には、「跑操」<sup>6</sup>および「家庭訪問」という行事がある。こうした学生指導のあり方は、大学での学習に対しても行われていると考えられよう。つまり、このような取り組みによって、「学校化された中で、形式的な授業に対する意識」（山田, 2010b）が形成されている可能性も考えられる。

## 第6章 学習行動と進路意識の関連性

本章では、まず、「三本大学生」の進路意識を明らかにし、上記のような高い学習への意識が進路意識にいかに関与しているかを検討する。

<sup>4</sup> 全国計338の都市をGDPや一人当たりの所得などにより分類し、最も発展している都市が一線都市と名付けられた。このように、それぞれの都市が「一線都市」から「五線都市」まで序列化されている。

<sup>5</sup> データの性質を統一するために、文系に偏っている「二本大学」のサンプルを除き、「一本大学」と「三本大学」で理系データのみを分析対象とした。

<sup>6</sup> 学校側が時間割を決めて、強制的に全校の学生に走らせるという活動である。もし、決められた通りに走らなければ、大学で学生の名前と専門などの個人情報を入力した大きなスクリーンに公表するという懲戒を実施している。

を与えているのかについて検討した。その結果として、「三本大学生」の特徴について、自主学習への意識が高ければ高いほど、就職志向が低くなり、進学志向が高くなるということが明らかになった。また、彼・彼女らは現在の中国の進学熱を背景にし、大学の取り組みからの影響も受けながら、非常に高いが、受動的な大学院への進学意識を持っていた。

まず、大学のランクによって異なる進路分化の実態を概観し、「一本大学」、「二本大学」と比較しながら、「三本大学生」の進路意識の特徴を浮き彫りにした。その結果、「一本大学生」は進学志向が非常に高いことが分かった。「二本大学」と「三本大学」では、進学志望者と就職志望者が拮抗していることが分かった。つまり、就職難や大学院進学のパブルというような状況において、進学も、就職もより不利な立場にある「二本大学生」と「三本大学生」はできるだけ進路を広げるため、将来の進路について、いまだに躊躇している姿がうかがえる。

次に、「三本大学生」の進路意識の特徴について、就職に関する質問項目から、「三本大学生」は「二本大学生」には及ばないものの、「一本大学生」より就職の目標が明確であることを明らかにした。また、進学したい大学院のレベルに関する回答からみれば、「三本大学生」は自分にとって入りやすい大学院に入る傾向が見られた。また、進学する理由について、「三本大学生」は「学位のため」と回答したものの割合がもっとも高いという結果を合わせて考えれば、「三本大学生」は学位を獲得するために、選抜度が低い大学院に進学することを望んでいた。

続いて、進路意識を就職志向および、進学志向という二つの側面に分け、それぞれの規定要因<sup>7</sup>を検討した。その結果、「一本大学生」と比較すると、「三本大学生」のみ、進路意識が大学での学習行動と緊密に関連をしていることが明らかにされた。具体的には自主学習への意識が高ければ高いほど、就職志向が低くなり、進学志向が高くなる。

最後に、「三本大学生」のみ、大学での学習行動と進路意識に関連が見られる点について考察した。第5章で明らかになったように、「三本大学」では教育と生活の両面に渡る指導を行っている、つまり、「三本大学」は「学校化」にある。本章で得られた結果を考えると、このような大学自体の取り組みが「三本大学生」の進路意識にも影響を及ぼしていることが言えよう。つまり、「三本大学生」の高い進学志向は学生の自発的なものではなく、大学自体の取り組みや現在の進学熱という社会背景など外部の要因に影響されている。

## 終章 結論と課題

以上「三本大学生」の学習行動を中心に、彼・彼女らの特徴について実証的に分析してきた。本章では、本研究の議論を総括し、主要な知見と本研究の意義、今後の課題について論じたい。

まず、本研究の知見は大きく次の3点にまとめられる。

第一に、「三本大学生」の属性を検討し、「三本大学生」は「一本大学生」「二本大学生」と比べれば、出身階層が低く、学力も低いことを指摘した。

第二に、「三本大学生」はエリートとされている「一本大学生」よりも高い授業への意識を持っていると言える。また、「三本大学」の取り組みを合わせて考えれば、「三本大学」が高校などと同様に、教えられた知識をただ受容す

---

<sup>7</sup> 二項ロジスティック回帰分析で分析する際に、データの性質を統一するために、文系に偏っている「二本大学」のサンプルを除き、「一本大学」と「三本大学」で理系データのみを分析対象とした。

るだけの「学校」になっている、いわゆる「学校化」していることを提示した。

第三に、「三本大学生」は「一本大学生」と同様に高い大学院への進学意識を持っていることを明らかにした。また、「三本大学生」の特徴として、自主学習を重視すればするほど、進学志向が高く、就職志向が低いことを指摘した。

以上の知見を踏まえ、本研究の意義は大きく以下の二つにまとめられる。

第一に、複眼的な視点から現在の中国の高等教育に生じた諸問題を考える必要があることである。本研究は大学ランクにより、学生の属性、学習に対する意識や進路意識が大きく異なっていることを明らかにした。つまり、高等教育が急激に発展している現在の中国においては、学生の多様化の時代がすでに訪れている。このような背景のもとでは、大学の多様化、さらに、学生の多様化を十分に考慮しなければならない。しかし、これまでの先行研究で注目されてきたのはエリート大学に限られていた。そのため、多くの学生に関する先行研究に提示された教育の質を高める指導方法はエリート大学生を対象にしたものに過ぎない。「三本大学生」という新たな学生群には必ずしも適切とは言えない。学力がより低い「三本大学生」には、基礎的な教養を身につけさせ、学力を向上させるとともに、「三本大学生」の現実的なニーズに応じながら、指導方法を探り出すことが望まれる。

第二に、「三本大学」の役割について考察したい。本研究の分析から、「三本大学生」は「三本大学」に「高校」のような役割を求めていることが分かった。具体的には、生活と教育の両面に渡った、いわゆる「学校化」している大学の取り組みの影響のもとで、彼ら・彼女らは高い学習・授業への意識が形成され、人生の第二次の「全国統一試験」、いわゆる大学院入試に対して、高い意識を示しているという。つまり、大学生、あるいは社会から望まれている「三本大学」の役割は、政府の意図している「応用技術型人材を育成する場」から外れていることが指摘できよう。

また、黄（2020）が中国の修士課程の特徴について論じたように、日本の研究大学では、修士課程のことを「博士課程前期」という呼称が使われている。すなわち、「博士課程後期」に継続して研究型人材を育成するのが日本の大学院の目的だと理解できよう。一方で、中国では、このような言い方がなく、修士課程は「完結段階」（p197.）として思われている。また、黄（2020）は修士課程進学者の希望からみれば、専門志向が非常に高いことが提示され、大学院進学希望者は労働市場の動向に参考しながら、進学専攻を決めるという傾向があると示唆した（pp.201-203）。すなわち、中国では、大学院から修了し、仕事をするという考えが徐々に一般的になっている。本研究の結果を含めて考えれば、現在の中国では、労働市場と結びつくという機能を果たす機関として、おそらく大学から徐々に大学院に「移行」していると考えられよう。また、この「移行」はエリート校では、はっきり捉えることが難しいが、ランクが低い「三本大学」では、より明確的に表している。

#### IV. 主要引用参考文献

鮑威・張芸, 2005, 「民办高等院校滿意度的实证分析」『中国高等教育研究』第3期, pp.45—47.

鮑威, 2006, 「中国民办高等教育的生成机制和区域发展模式」『北京大学教育評論』第4卷第4期, pp.149—159.

鮑威・文東茅, 2007, 「首都高等教育質量調査報告」『北京市高等教育学会2007年論文集』, pp.3—20.

- 鮑威, 2016, 「民営高等教育と『独立学院』の新たな展開」『中国における高等教育の変貌と動向—2005年以降の動きを中心に』高等教育研究叢書 132号, 広島大学高等教育研究開発センター, pp.33-44.
- 常媛, 2021, 「独立学院人才培养质量的现状调查与提升策略」『中国高等教育』, pp.53-55.
- 費堅, 2008, 「当前独立学院独立的困境研究」『高校探索』第1期, pp.99-103.
- 高静, 2011, 「中国における大学生の就職意識」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部, 第60号, pp.73-82.
- 黄梅英, 2020, 「中国における修士修了者の労働市場での評価」『文系大学院をめぐるトリレンマ』吉田文編著, pp.196-212.
- 広田照幸・吉田文ほか, 2013, 『大衆化する大学—学生の多様化をどうみるか』岩波書店.
- 広田照幸ほか, 2013, 『組織としての大学—役割や機能をどうみるか』岩波書店.
- 広田照幸, 2019, 『大学論を組み替える—新たな議論のために』名古屋大学出版会.
- 居神浩ほか, 2005, 『大卒フリーター問題を考える』ミネルヴァ書房.
- 石井光夫, 2014, 「中国の大学入試改革と学力保証」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第9号, pp.1-15.
- 賈秉权, 2014, 「三本大学生的真实处境与愿望」『西北成人教育学院学报』第5期, pp.75-77.
- 金山権, 2016, 「中国における大学教育の質的向上政策」『桜美林経営研究』第7号, pp.21-37.
- 葛城浩一, 2007, 「Fラン大学生の学習に対する志向」『大学教育学会誌』第29巻第2号, pp.87-92.
- 葛城浩一, 2010, 「難易度の低い大学における学習行動」『比治山高等教育研究』第3号, pp.49-61.
- 児島功和, 2011, 「下位大学の若者たち学習の意味と社会的ネットワーク」『若者問題と教育・雇用・社会保障』法制  
大学出版局, pp.157-182.
- 李敏, 2005, 『中国高等教育の拡大と大卒者就職難問題』広島大学出版会.
- 雷万鵬, 2005, 「高中生补习教育支出影响因素及政策启示」『教育と経済』pp.39-42.
- 劉文君, 2007, 「高等教育のマス化と構造変化」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第47巻, pp.339-450.
- 陸学芸, 2002, 『当代中国社会階層研究報告』社会科学文献.
- 劉志業・何晓毅, 2008, 「中国における高等教育研究の現状と課題」『大学教育』第五号, pp.1-8.
- 李延保ら, 2013, 『独立学院調査報告』中山大学出版社.
- 馬志遠, 1998, 「現代中国大卒者就職過程に関する実証的研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第38巻,  
pp.135-144.
- 三宅義和, 2006, 「非選抜型大学生の職業選択行動に関する調査報告」『神戸国際大学経済文化研究所年報』第15  
期, pp.23-43.
- 三宅義和, 2005, 「非選抜型大学の就職支援体制に関する一考察」『神戸国際大学紀要』第68期, pp.11-27.
- 三宅義和, 2008, 「非選抜型大学生の授業イメージに関する調査報告」神戸国際大学経済文化研究所編『経済文化研  
究所年報』第17号, pp.95-112.
- 三宅義和, 2011, 「大学生の学びへの姿勢と大学の選抜性」神戸国際大学経済文化研究所編『経済文化研究所年報』  
第20号, pp.1-13.

- 三宅義和ほか, 2014, 『大学教育の変貌を考える』 ミネルヴァ書房.
- 中村高康, 2018, 『暴走する能力主義』 ちくま新書.
- 西本佳代, 2008, 「大学生の学習行動に及ぼす就職意識の影響」『広島大学大学院教育学研究科紀要』 第三部第 57 号, pp.125-132.
- 小川佳万, 2019, 「中国の大学入試における募集人員の地域配分に関する省別比較」『広島大学大学院教育学研究科紀要』 第三部第 68 号, pp. 1-8.
- Pascarella, E.T.& Terenzini, P.T., 2005, *How college affects students: A third decade of research*,. San Francisco, CA Jossey-Bass Publishers.
- 潘秋静, 2019, 「中国における『独立学院』の自立化問題と今後の動き—その制度の複雑性に基づいて」『大学論集』 第 51 集, pp.143-158.
- 佐藤郁哉, 2019, 『大学改革の迷走』 筑摩書房.
- 史静寰, 2011, 「基于学习过程的本科教育学情调查」『清华大学教育研究』 第 4 期, pp.9-23.
- 寺崎里水, 2014, 「ノンエリート大学生の進学と学び (2)」『福岡大学研究部論集 A』 13 (3) pp.9-14.
- Trow, Martin, 1976, *The University in the Highly Educated Society : From Elite to Mass Higher Education*, Tokyo University Press.  
(=1976, 天野郁夫・喜多村和之訳『高学歴社会の大学』東京大学出版会).
- 邵姜魏, 2013, 「民営高等教育に関する中国政府態度の変化」『日本教育社会学大会発表要旨集録 (65)』 pp.364-365.
- 邵姜魏, 2014, 「民営大学に対する学生の意識調査—山東省の青島工学院を事例として」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』 第 22 号-1, pp.23-33.
- 武内清, 2003, 『キャンパスの今』 玉川大学出版部.
- 王偉, 2005, 「学部生の進路志向における家庭的背景の影響」『教育社会学研究』 第 76 集, pp.245-263.
- 王傑, 2008, 『中国高等教育の拡大と教育機会の変容』 東信堂.
- 魏丽娜・劉寿, 2010, 「辅导员对高校“三本”大学生就业观教育」『中国西部科技』, 第 34 期, pp.87-88.
- 山田浩之・葛城浩一, 2007, 『現代大学生の学習行動』 広島大学高等教育研究開発センター.
- 山田浩之, 2009, 「ボーダーフリー大学における学生調査の意義と課題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』 第三部, 第 58 号, pp.27-35.
- 山田浩之, 2010a, 「ボーダレス・ユニバーシティ研究の現状と課題」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』 第 56 卷, pp.262-267.
- 山田浩之, 2010b, 「地方大学における学生の学習行動と学習意識—大学の学校化がもたらす学習の形骸化—」『比治山高等教育研究』 第 3 号, pp.37-48.
- 楊東平, 2009, 「中国における高等教育の不平等とその是正」『中国 21』 第 30 卷, pp.131-154.
- 吉田文, 2018, 「高等教育の拡大と学生の多様化」『高等教育研究』 第 21 集, pp.11-37.
- 張玲, 2016, 「中国中央政府の教育政策動向に関する考察」『ICCS Journal of Modern Chinese Studies』 第 9 卷, pp.65-72.